

宮崎 二〇〇九年の新書ベストセラーでは、香山リカ『しがみつかない生き方』（幻冬舎新書）や宮台真司『日本の難点』（同）が、ほぼ同世代の仕事仲間の著作ということもあって感慨深いものがあります。お二人とも八〇年代のサブカルチャーを背景知としてメディアに登場した論客で、その言説は人文書読みのあいだではメジャーでも、なかなか一般受けしなかった。それが去年はついにブレイクした。同僚の成功を喜ぶ反面、なんだか自分がとても年を取ったような気分になりました。

永江 それはある。『日本の難点』はよく読まれましたね。

宮崎 政権交代に向かう時代の空気に後押しされ、かつその流れに棹さしたアクチュアルな内容ですよ。それと同時に、『制服少女たちの選択』（朝日文庫）以降の宮台社会学一五年間の歩み

のダイジェストにもなっている。

永江 香山さんの新書は『ポケットは80年代がいつぱい』（バジリコ）なんか比べると、フルスイングではない。『写経のように書く』のがモットーの人だけど、彼女自身、こういう本が当たって少し驚いているでしょう。

宮崎 ところで昨年の九月に、長らく『王様のブランチ』（TBS系）で本のコーナーのコメンテーターを務めた松田哲夫氏が番組を降板しましたね。このコーナーは各書評媒体の中で最も影響力があるとされてきたわけですが、新聞や出版の情報発信力が低減している現在、テレビの活用法を真剣に模索すべきではないでしょうか。

永江 松田さんとは『中央公論』（二月号）で対談したんですが、そのとき松田さんは、二〇〇九年の新書は完全に自己啓発書、ビジネス書モードになってしまったと言っていました。

確かに新潮新書、PHP新書、幻冬舎新書などそういう傾向が強いですし、

ベスト新書、学研新書、角川SSC新書、デイスカヴァー携書、それに去年新たに参入した2545新書（フォレスト出版）などまさにそのラインナップです。社会や市場の要請でしょうが、やはりどこかお手軽感が否めない。

ただその一方で、本格的な教養新書、内容の濃い社会状況論を展開した新書も昨年は多く、ヨイシヨするわけではありませんが、中公新書は頑張りました。ベスト5に入れようか迷ったものに、天野郁夫『大学の誕生』、新自由主義経済の総本山であるシカゴ学派を総括した根井雅弘『市場主義のたそがれ』、岡田暁生『音楽の聴き方』、年末に出てベスト5にも入れた熊野純彦編著『日本哲学小史』など面白い力作が多かった。

宮崎 同じ熊野純彦の『和辻哲郎』（岩波新書）や、佐々木敦『ニッポンの思



2009年の新書総ざらい

大不況下の 百花繚乱

永江 朗 / フリーライター
宮崎 哲弥 / 評論家

対談

永江 斎藤さんは「倫理や価値は脳に還元できないから、価値判断の問題を科学的に根拠づけよう」とすると、ほとんど疑似科学、つまりトンデモ説になる」と言いますね。

宮崎 そういうふうには価値判断を聖域化するのには疑問ですね。「倫理や価値」が脳以外の何に由来するかを明示しないのなら、単なる形而上学への退行と言われても仕方がないでしょう。

実際には脳科学や行動遺伝学は、人の社会的行動や利他的な振る舞いのメカニズムの解明にも迫りつつあります(村井俊哉『人の気持ちが変わる脳』ちくま新書)。他方で神経経済学と呼ばれる、人間の嗜好構造や欲望形成を神経科学的レベルで捉えようとする領域も注目されている。そもそも「人間に自由意思はあるのか?」といった「倫理」問題が、脳科学の知見を軸に議論されていること自体、その可能性と脅威とを示しています(フレント・ガールランド編『脳科学と倫理と法』みすず書房

など)。ちなみに仏教は価値判断の存在を認めないので、脳科学の立場におおむねアグリーです。

永江 でも、性差を脳やホルモンの違いで説明したり、さらに右脳・左脳で解説したりするような、ジャ・ナリズムに流布する脳科学の言説は、半分くらいはトンデモ説でしょう。

宮崎 「脳は全体の一割しか使っていない」とかね(笑)。それらは神経神経話と呼ばれる浮説の類で、真つ当な脳科学者は完全に否定しています。日本神経科学学会はちゃんと警告を出していますよ。

反経済成長をめぐって

永江 平川克美『経済成長という病』(講談社現代新書)はどうですか。

宮崎 これに限らず、反成長論というのは、実務家が陥りがちなローカルミニマム(局所最適解)のマクロ経済へ

『社会をつくる自由』です。

竹井氏は長く集合住宅のガヴァナンスを研究しているミクロ政治学者で、本書の基調は日本の共同体論批判です。そこでは「皆、仲良し」の専制を超えて新たな社会性へと踏み出すことができるかが問われている。その課題に基本的に同意しながら、シニカルに突き放してみせるのが岡本氏の本。「内心は人それぞれ」を前提として行動面を規律する欧米由来の憲法や民主主義が日本人はついに理解できない。ならば開き直って、「皆、仲良し」を基調とする日本のモラリズム「世間さま主義」で制度を再構築してみたら……という内容。後段はあくまで皮肉なんですけどねえ。(笑)

永江 『社会をつくる自由』には新郊外論のような印象を受けました。

宮崎 他に河合幹雄『日本の殺人』はデータのにも充実していて、真つ当な議論のテーブルを形成する名著ですね。永江 河合さんには『終身刑の死角』

の不当拡張にすぎないと思いますね。永江 民主党政権は反経済成長主義的な政権という捉えられ方があふれ、世の中にも「もう経済成長はいいよ」という空気もある。

宮崎 そんなバカげた思潮につける薬として、これも新書判ですが、芹沢一也・荻上チキ編『経済成長って何で必要なんだろう?』(光文社)を挙げておきます。新進のマクロ経済学者、飯田泰之氏が、赤木智弘氏や湯浅誠氏らと相手に、経済成長の必要性、ゼロ成長の弊害——失業を増加させ、社会保障を困難にし、格差を拡大、貧困を深めていく——を熱く語っています。

反成長パラダイムの議論として真面目な検討に値するのは、『コミュニティを問いなおす』(ちくま新書)で大佛次郎論壇賞を受けた広井良典氏の定型社会論のみでしょう。

成長が必要だからといって、年率一〇%といった高度成長を想定しているわけではありません。せいせい二〜三(新書Y)もありますね。

宮崎 河合氏と『家族内殺人』(同)を編纂した浜井浩一氏は、犯罪の実証研究では今や第一人者です。

村上宣寛『心理学で何がわかるか』も良書です。心の科学は、精神医学、心理学、脳科学の三方向からのアプローチがメジャーで、これらが一部重なり合い、一部対立しながら日進月歩で進んでいる。この本はあくまでエビデンス・ベースト(根拠提示)という態度を堅持しながら、「科学としての心理学」を説き明かしている。子育て神話やトラウマ理論など俗説への批判も豊富で、心理学界ではタブーのはずの臨床心理士の能力不足問題を堂々と取り上げるなど、「ああ、科学って素晴らしい」と思わせませう。(笑)

永江 去年、宮崎さんは河野哲也『暴走する脳科学』(光文社新書)と坂井克之『心の脳科学』(中公新書)を推していましたが、ゼロ歳児教育とか、三歳で脳が固まるとか、右脳・左脳の効用

日本の共同体論 心の科学、医療……

永江 ちくま新書はどうですか。

宮崎 あまり話題にならなかつたけど、この新書シリーズならでは、といった本が多数ありました。たとえば岡本薫『世間さまが許さない!』、竹井隆人

%の穏やかな成長です。それを実現するために大きな役割を果たすのが中央銀行です。個人のベスト5に入れた岩田規久男『日本銀行は信用できるか』(講談社現代新書)は、その肝心の日銀がいかに正常に機能していないか、デフレ対策を怠っているかを論じ尽くした警世の書です。

永江 池上彰『日銀を知られば経済がわかる』(平凡社新書)もあります。

宮崎 一般的な解説書だけど日銀に甘すぎますね(笑)。しかし中央銀行制度が注目されるのは悪いことではありません。もっと日銀に関する本を出版してほしい。